

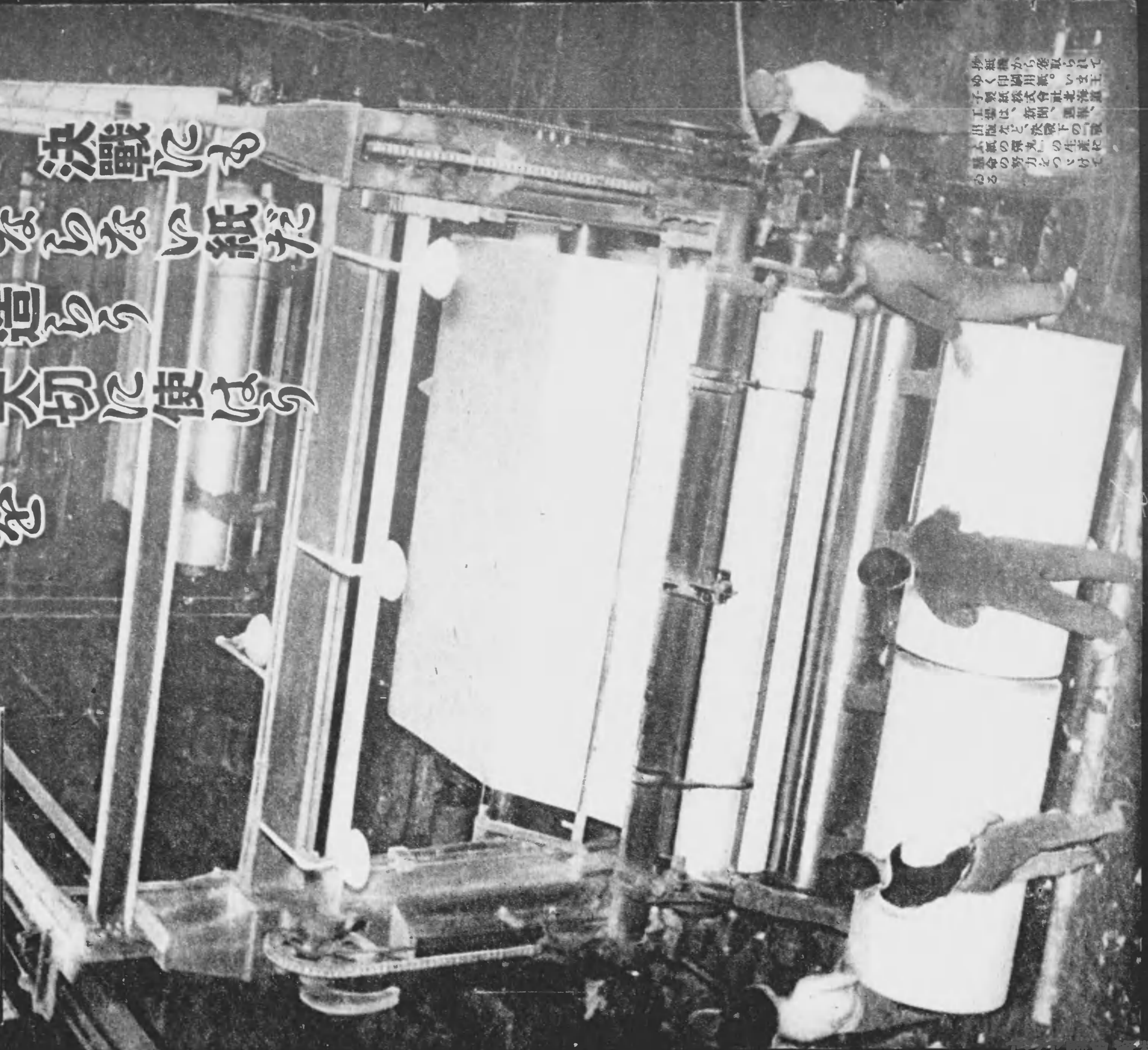
情報編局 第十輯 五月廿五日 第三四四號

時立札

生活にも 決戦にも
なくてはならない紙だ
もつと 造らう
もつと 大切に使はう
戦紙を

眞眞
週報

抄紙機から巻取られてゆく印刷用紙。いま王子製紙株式会社北海道工場は、新聞、週報、出版など、決戦上の「戦紙」の生産に、懸命の努力をついでいる。



戦の勢轉換の神機いたる



勝利の翼をつらね、敵の本陣を襲撃する我軍の新機軸機群
 機群 古川義雄大尉

おそましくも我が本土を犯し襲つた敵の機動部隊は我が陸海軍航空部隊の猛反撃に遭ひさらに我が海上部隊をも加へての急襲に算を亂して退走を圖つてゐる

敵は、十月十日には我が西南諸島、奄美大島、沖縄島、宮古島等に襲撃し、同十二、十三、十四日には臺灣を襲ひ來つたのであるが、雖て、この日あるを豫期してゐた我が陸海軍航空部隊の精銳は、機を逸せず、同十二日夜以來この敵機動部隊を臺灣東方海上に捕獲、雷爆弾を以て、十三日十二時三十分、同十五時三十分、さらに十六日十五時等の相次ぐ大本營發表にある如き戦果、航空母艦十隻、戦艦二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦二隻、航空母艦三隻、戦艦一隻、巡洋艦四隻、駆逐艦十一隻撃破、米機機群数百機中、百六十機を撃墜するの戦果を挙げた

十一日夜、我が米敵機は視界不良なる中に臺灣南東海面を遊弋中であつた敵機動部隊を發見してをり、この「敵發見」の報に臺灣全島は、撃つて敵機動部隊の襲撃の勢を撃つたのである。一方、敵機動部隊は、我が米敵機の出現を知るや、我が先制攻撃により倒壊破壊されることを恐れて、十一日七時頃より艦隊の大編隊を臺灣全島各地に分散、飛避せしめ攻撃し來つた

その結果は、米襲した敵艦機群の四十分の一乃至三分の一を撃墜され、十二日夜は機動部隊自身、夜半に至るまで、我が陸海軍航空部隊の猛烈なる雷爆弾、機火の洗禮をうけるに至つた。翌十三日、十四日も戦況は繼續され、十四日に至つて我が激撃戦は雷爆戦に轉じ、海上部隊も参加し來り、この方面の敵機動部隊は徹滅の打撃を喫したのである

今次、敵の有力機動部隊による我が西南諸島、臺灣方面に對する襲撃は、如何なる企圖に基づくものか、いま俄かにこれを断じ得ない現代戦の戦場は、その陸戦たるも、海戦たるもを論ぜず、極めて廣大である。開口も廣ければ奥行きも深い。歐州戦線のみならず、太平洋戦線のみならず、これは十分に理解できる事柄であらう

要するに現代戦の戦場は、地理的な考へ方からいへば、極めて廣大ではあるが、時間的に考へれば、寧ろ一日と狭くなりつゝあるものといへる。これは外見からみると、甚だ矛盾してゐるやうだが、これが現代戦の戦場の眞實の姿である

このやうに現代戦、殊に海洋戦の戦場は廣大で、しかも狭小であるから、敵の機動部隊がソロモン群島、ニューギニア島方面、さては東カロリン諸島方面において、彼我激戦を展開してゐる最中にも拘はらず、我が西南諸島、臺灣方面に敵が出現し來つたのは、當然

あり得ることであつて、いはば、これが今日の戦争なのである。この一事のみに捉はれてはならない。事實、戦場が我が本土近くにあり、戦争の勝敗は全く別の問題である。戦争に對しては、戦場が何處にあるかといふことより、敵を何時どらして撃滅するかの方が廣大であり、また敵撃滅こそ、その終局の



一機一騎の雄 石川 謙介
 太平洋を飛ぶの血で紅の海とさん

目的であらねばならぬ
 たとへ敵の大軍が群々として城下に迫り來ても、旺盛な戦意、敵必滅の堅確な決心と、その決心に裏付けられた戦争生活が健全である限り、勝利は断じて我にある。元寇の役はじめ、東西の歴史にはその實例は枚舉に遑ない。臺灣を中心とした今次の戦闘もまた如實にこれを證明したものとといへよう。それは民防空の完備と軍作戦の一體化が、如何に敵に痛烈な打撃を與へ得るか、事實を以て明答したにほかならない

さらにまた、隔絶した洋上の孤島では、現代戦の主兵力である航空兵力の強大な展開は地理的な制限をうけるが、日本本土の一角となつてゐる臺灣のやうな大きな島では、飛行場を數多く設け得るし、且つ航空兵力を集結することも極めて自在にでき、従つて強大な航空兵力を展開することもできるから、作戦が要求する航空兵力をさへ充たすことができれば、精強な我が陸海軍航空部隊は、敵機動部隊が幾度來り襲つても、これを撃滅し去

ることは疑ひない。況んや本土では、極めて短時間に航空兵力を集結できることは甚だすまでもなく、撃滅の神機も存することも疑ひない

さる九月十二日から同十六日まで行れた第二回ケベック會議の後、ルーズヴェルトは新聞記者團に「如何なる困難があつても日本の島の根を止める決心である」と述べ、チャーチルもまた、「英國は許される限りの国力を日本撃滅に傾注する」と宣言した事實、更にルーズヴェルトがその四週實現の運籌策動に戦局を利用した見地からいつても今後もたとへばどんな打撃を蒙り、損害を出しても意に介することなく、敵の日本本土に對する攻撃は最後まで軌道に保たれるであらう。かうした敵の執拗な出撃こそ、我が方にとつて戦局を有利に轉じ得る絶好な機會である。今次の敵機動部隊襲撃の機に乗ずるならば、戦場を敵本土に運むことは可能である。そのためには、現代戦の主兵力たる航空兵力の強化に總力を結集することだ。帝國聯合艦隊は航空艦隊、航空母艦を主兵力とする艦隊でなければならぬし、陸海軍の基地航空部隊は更に強化されねばならぬ。陸軍航空部隊が本格的な海洋航空隊に参加し、陸軍雷撃機の戦術をみたのは、陸海軍基地航空部隊の強化を物語るものであるが、彼後にあるわれらは、陸海軍航空部隊の緊密な協力や、新鋭機の出現に安んずる前に、當然來るべき一大決戦に備へて、我が航空兵力陣の全面的な強化への精進を決意すべきである

この決意の實證こそが、神州維持の信念の顯現であり、勝利への大道である。そしてガダルカナル島に、今日午後四時四十分あり、ペリリュー島、モロカイ島、及びニューギ

戦果集計 (十月十七日六時迄)

艦種	沈没	撃破
航空母艦	二隻	七隻
戦艦	二隻	二隻
戦艦大くは巡洋艦		二隻
巡洋艦	三隻	四隻
駆逐艦	一隻	
不詳		二隻
機群沈没合計		四二隻

(但し飛行機機群は計上せず)
 右集計は臺灣島及び東方諸島に飛来する敵二機機群等にも對する戦果を含む

ニア島の森林中に、肉弾、以て敵機を撃つといふ海軍飛行兵に懸へ、近くはサイパン島、アニヤン島、大宮島に全自戦死せられた英軍、皇軍に殉じた同胞の英魂に酬ゆる途でもある

戦場を敵地に押し返す好機は眼前にある。されば軍官兵一體、一糸亂れず、戦力の増強、とりわけ航空兵力の増強に全力を傾け、貴重なる作戦上の「時」を喪つてはならぬ。今度の大戦果の陰には陸海の荒蕪の奇い殉國の血潮、飛行機はじめ重大な資材の消耗がある。一刻も早くこの消耗を補ひ、再び、二度繰返さるゝであらう敵の出現に備へることが作戦上の「時」を活かすことである

絶対に、この好機を逸してはならない
 大本營海軍報道部



軍千機も集め、運の運動にしてやまき、と意気は昂んで襲撃へ
 機群 古川義雄大尉

毛を産する大陸を 大々大に拡大



その大陸の作戦もまた、著るしく決戦の様相を帯びて来た。いま、大陸各地に激戦しつつある皇軍の作戦を要約すると、今春開始された河南作戦に引続いて長沙の作戦、衡陽の攻略戦と、それから更に湘南方面に沿って、現在大連撃作戦が行はれてゐる。これに呼應して九月上旬、南支方面のわが部隊は西江の沿岸地区、および

○ 陽明山方面に連発された軍機部隊の莫大なる犠牲

雷州半島方面から東部の第七艦隊に對して進攻を開始して、目下瓊州、瓊州の嶺に達出して、なほ進軍中である。また浙江省の金華附近から行動を起したわが部隊は、九月九日に温州を攻め、さらに他の部隊は蒼南の對岸にある要衝福州を攻略した。

この地上作戦の勝利に呼應して、わが航空部

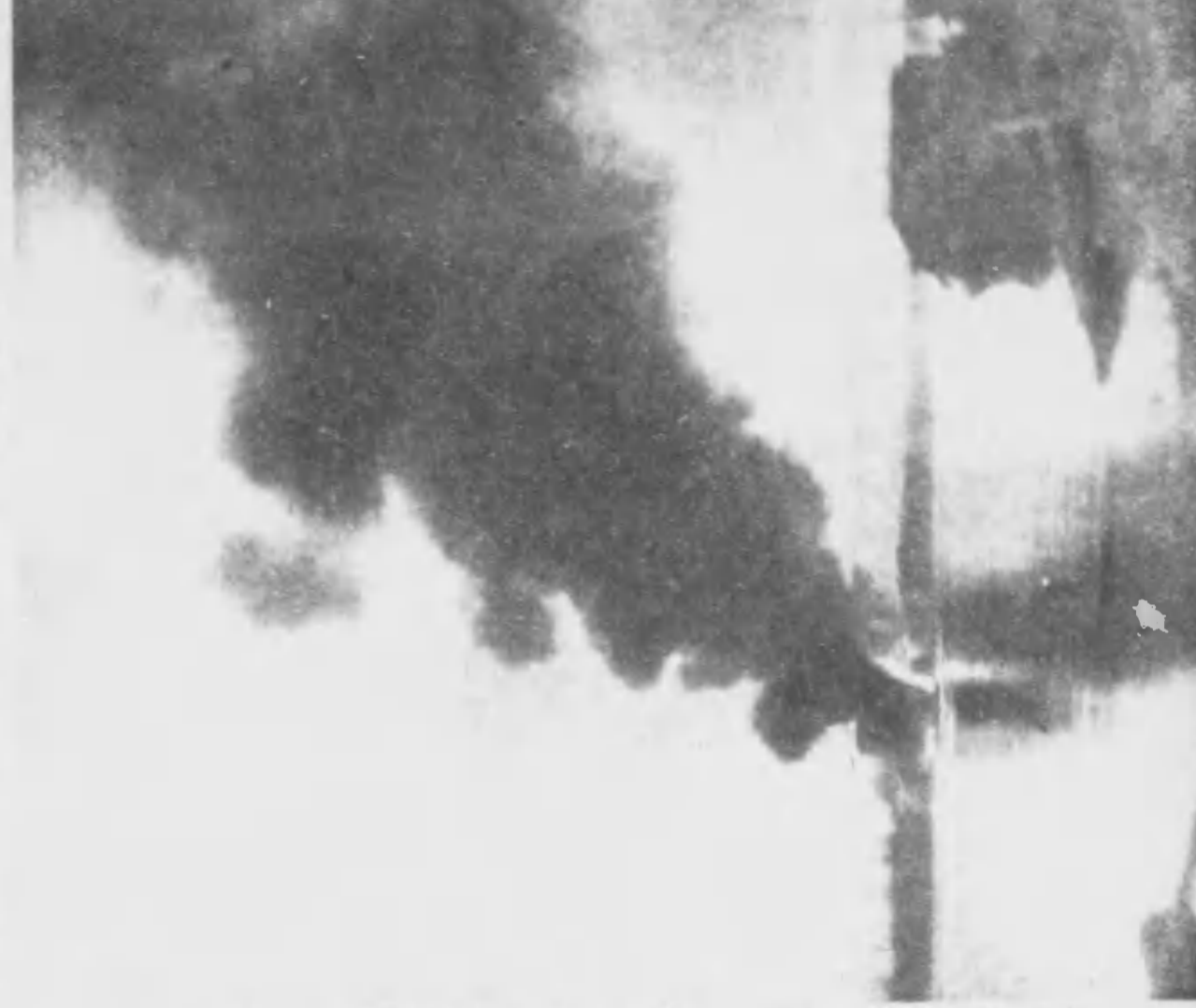
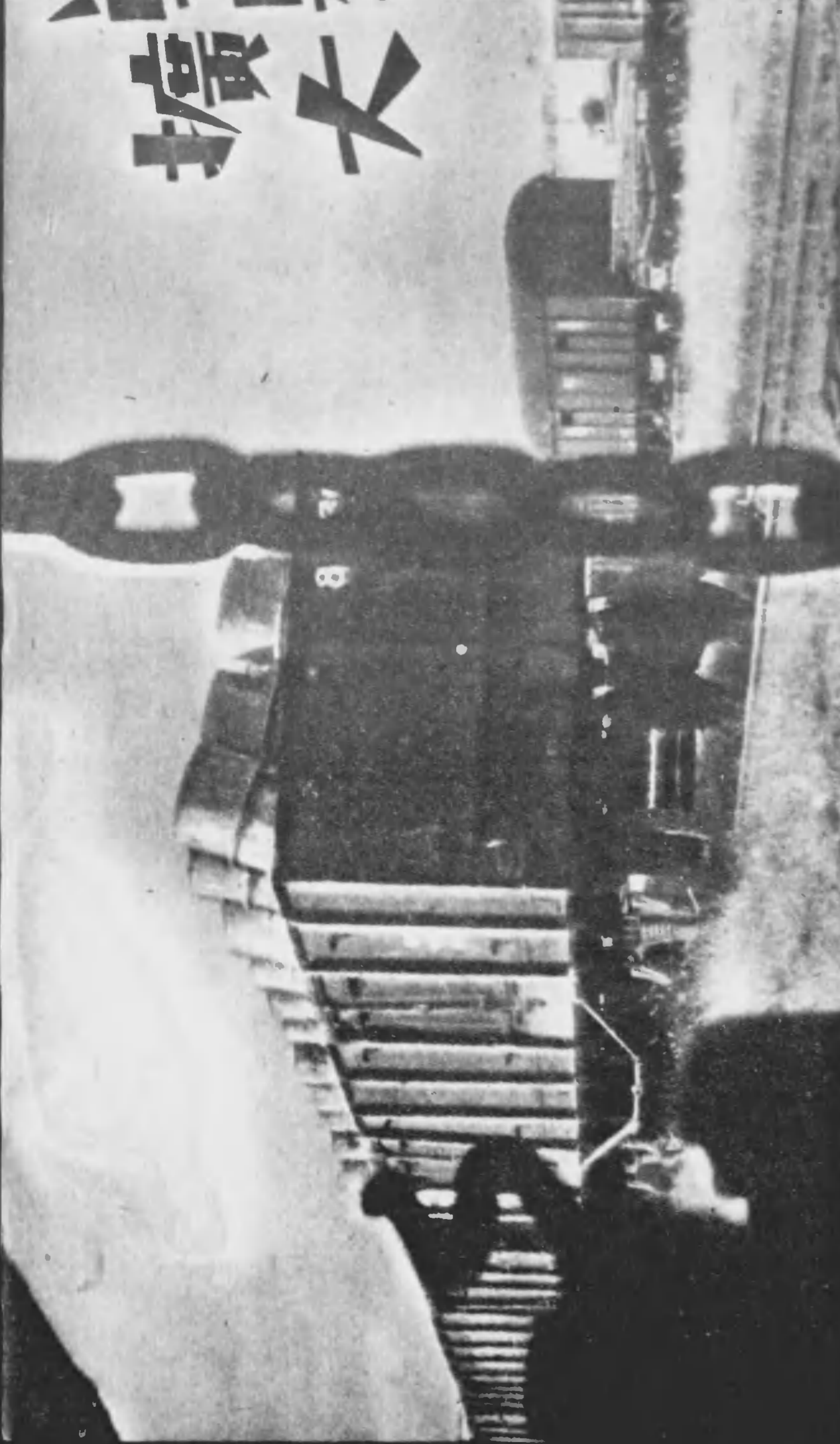
○ 我が艦隊の進攻を受けるたびは敵が逃げこんだ陸軍防務隊（衡陽附近）

隊も、連日あらゆる強襲作を敢行して、敵航空兵力の撃退に出動、赫々たる戦果を収めてゐる。大陸におけるわが方のかゝる急進な戦果の擴大が、大陸を對日總反攻の主眼地たらしめんと企圖する敵軍に與へた影響は頗る甚大であり、敵アメリカ太平洋艦隊司令官ニミッツも『東南支隊艦における日本軍の進出は極めて重

大な事態を生起せしめざる可くない。もしも日本軍の進出を阻止できなければ、同方面における米軍將來の作戦は大々大困難に遭遇しよう』と、皇軍の成功を深刻に憂慮してゐる。一方、敵アメリカ國內においては敵選を続ける軍艦隊に對する非難の聲高きいさや皇軍機隊の進軍と共に敵陣容の動搖は益々著るべくもない。

○ 必要の二機、夕陽迫る江上で雲煙を吐いて後方へく逃げ去る（湖南方面にて）

撮影 日本映画社



○ 息つくひまもなく南支の要衝福州を占領した新編隊は、陣地にまはれて北武等々々人集する

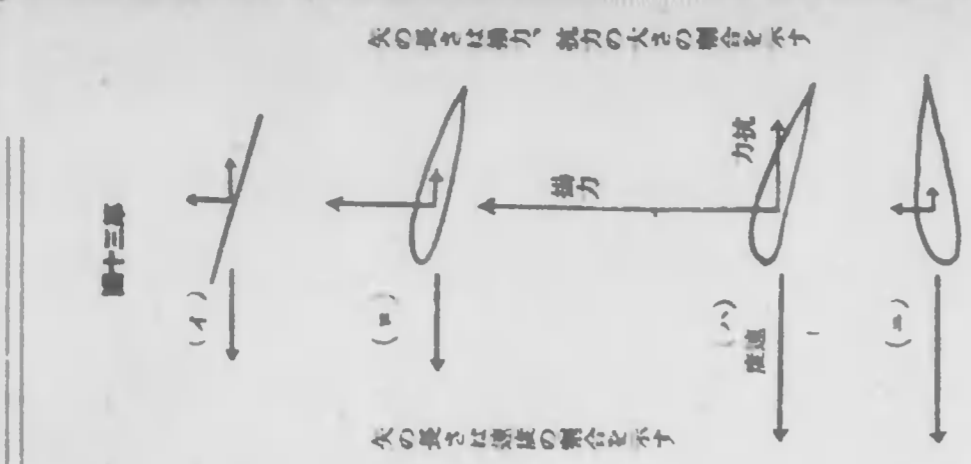
空航庭家

らに、空気抵抗が少なくなります。このやうに飛行機を軽く作り、主翼に小さいものを使ふのは當然ですが、目方がきまつてゐる飛行機の主翼をできるだけ小さくするのがこの話の目的です。

例へば、飛行機の目方が二二〇キロで、その翼が三〇平方メートルのときと、一五平方メートルに間に合ふときとは、後の飛行機がすつと速く飛べます。前の翼では一平方メートルに七〇キロの目方ですが、後のものは一四〇キロの目方がかゝつてゐます。そこで翼を小さくするには翼一平方メートルに掛る目方を増せばよいことが分ります。これを翼面積の問題といひます。

もとく翼は飛行機に浮く力をつけるもので、すから、浮く力さへ大きくすれば小さくてもよいのです。そこで問題は同じ大きさの翼でたたくさんの浮く力を出せばよいわけですが、この浮く力は揚力と呼ばれてゐますが、この揚力を増すには、翼の切り口の形を適宜にすること、速さを増すことの二つよりほかないのです。(翼の角度を大きくしても、抵抗がよえるので問題になりません)

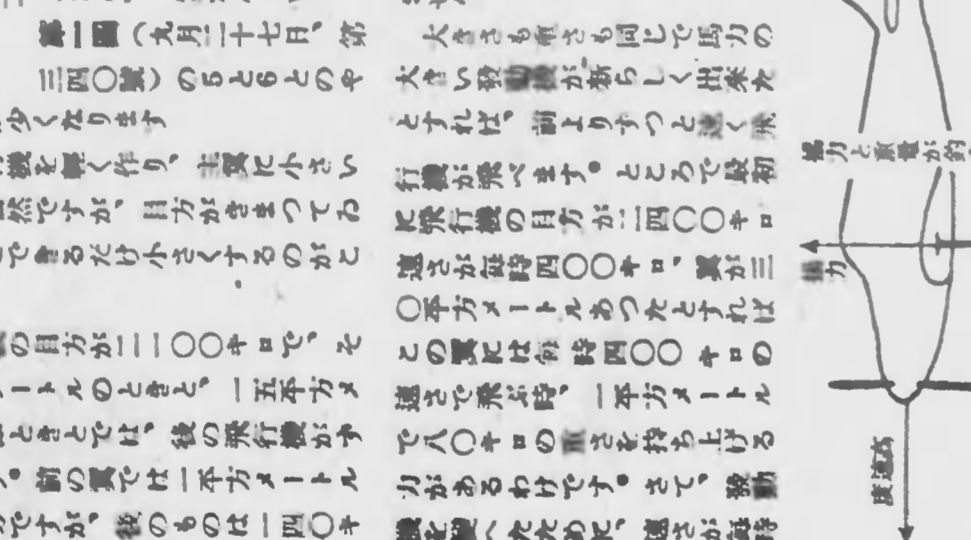
翼も初めはたいへん板を少しそらせただけでしたが、機板では支夫でないで、下側に肉をつけました。ところが肉の厚み方では非常に揚力があつたので大いに研究されました。機板だけでは、角度がなくなると揚力もなくなりますが、ところが、今日の進歩した飛行機の翼は、水平にした時でもちろん、少し位下向きに



第二回に、飛行機が速く飛ぶための条件に、なるべく小さい翼で飛ぶことといふのがありましたね。今度はその説明をしまさう。

これまで、發動機、發動機などについて、何でも無いことと二回目にいひましたが、アロベラも同じで、大きくしても自分はいかに速くといふのです。これは飛行機が小さい主翼で飛ぶためで、翼が小さいと、

第二回(九月二十七日、第三四〇号)のちとちのやうに、



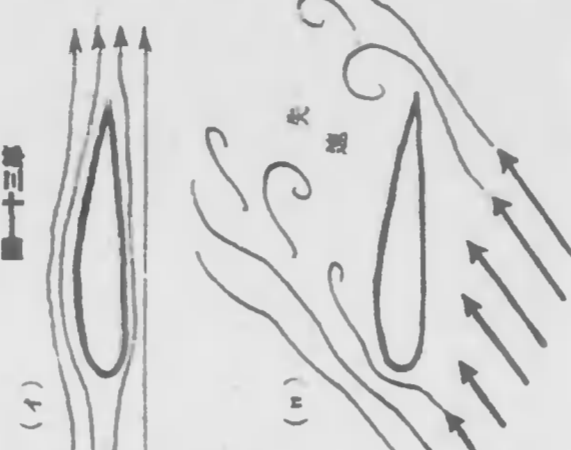
第一回(九月二十七日、第三四〇号)のちとちのやうに、空気抵抗が少なくなります。このやうに飛行機を軽く作り、主翼に小さいものを使ふのは當然ですが、目方がきまつてゐる飛行機の主翼をできるだけ小さくするのがこの話の目的です。

例へば、飛行機の目方が二二〇キロで、その翼が三〇平方メートルのときと、一五平方メートルに間に合ふときとは、後の飛行機がすつと速く飛べます。前の翼では一平方メートルに七〇キロの目方ですが、後のものは一四〇キロの目方がかゝつてゐます。そこで翼を小さくするには翼一平方メートルに掛る目方を増せばよいことが分ります。これを翼面積の問題といひます。

もとく翼は飛行機に浮く力をつけるもので、すから、浮く力さへ大きくすれば小さくてもよいのです。そこで問題は同じ大きさの翼でたたくさんの浮く力を出せばよいわけですが、この浮く力は揚力と呼ばれてゐますが、この揚力を増すには、翼の切り口の形を適宜にすること、速さを増すことの二つよりほかないのです。(翼の角度を大きくしても、抵抗がよえるので問題になりません)

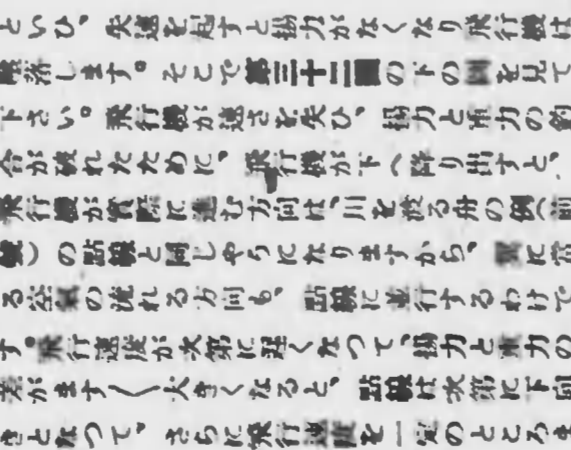
翼も初めはたいへん板を少しそらせただけでしたが、機板では支夫でないで、下側に肉をつけました。ところが肉の厚み方では非常に揚力があつたので大いに研究されました。機板だけでは、角度がなくなると揚力もなくなりますが、ところが、今日の進歩した飛行機の翼は、水平にした時でもちろん、少し位下向きに

たいへんに遅い時は、どの位の速さがよいかといふと、少くとも時速二〇〇キロ前後でないといふ事です。二〇〇キロといへば汽車の全速力で走つてゐる速さですが、この飛行機は、とても時速二〇〇キロでは飛べません。なぜなら飛行機には速さを加減できる限度があつて、非常に速く飛ぶ飛行機は一番遅く飛んでも相當速



翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。



翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

小銃弾

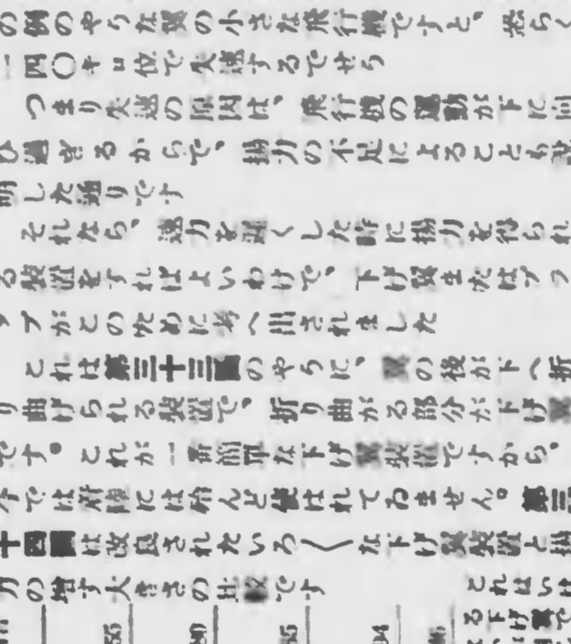
飛行機が何より大切なことはよく知られる通りですが、土地を占領し敵の止めをさすのは、やはり兵隊です。兵隊が命よりも大切にしている小銃、つまり小銃について説明しまさう。

小銃弾は、第一回で示されてゐる通り、敵めがけて飛んでゆく弾丸と、弾丸を発射させるやうに火薬が埋められてゐる銃身との二つの部分からできてゐます。弾丸は速く飛ばせるために、目方の重い、つまり比重が大きい鉛のやうな金属で造られますが、鉛は非常に軟いものですから、形を保つためにニッケルと銅を混ぜた強い白銅で周囲を包まねばなりません。これを被甲といふので、第一回をよく見て下さい。弾丸の後の部分といはれるところの被甲が切れてゐるでせう。被甲に丸い孔があつて、中から鉛の弾身が見えます。どうしてかゝつてゐるかといふと、大切な働きをするためなのです。

小銃に填められた弾丸は、引金を引いた瞬間の例のやうな翼の小さな飛行機ですと、恐らく一四〇キロ位で失速するでせう。つまり失速の原因は、飛行機の運動が下に向ひ過ぎるからで、揚力の不足によることも説明した通りです。

それなら、速力を速くした時に揚力を得られる装置をすればよいわけで、下げ翼またはフックがこのために考へ出されました。

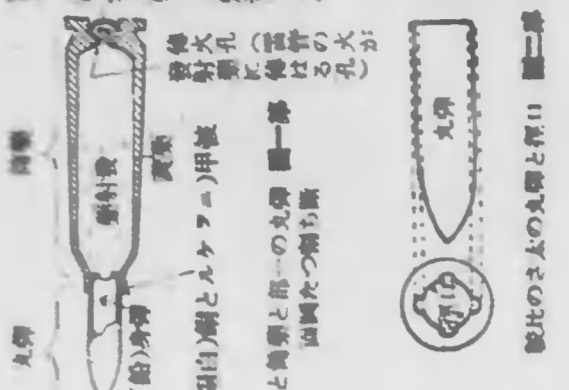
これは第三十三圖のやうに、翼の後に下へ折り曲げられる装置で、折り曲がる部分が下げ翼です。これが一番簡単な下げ翼装置ですから、今では若しくは幼くは使はれてゐませんが、第三十四圖は改良されたいろいろな下げ翼装置と揚力増大の比較です。



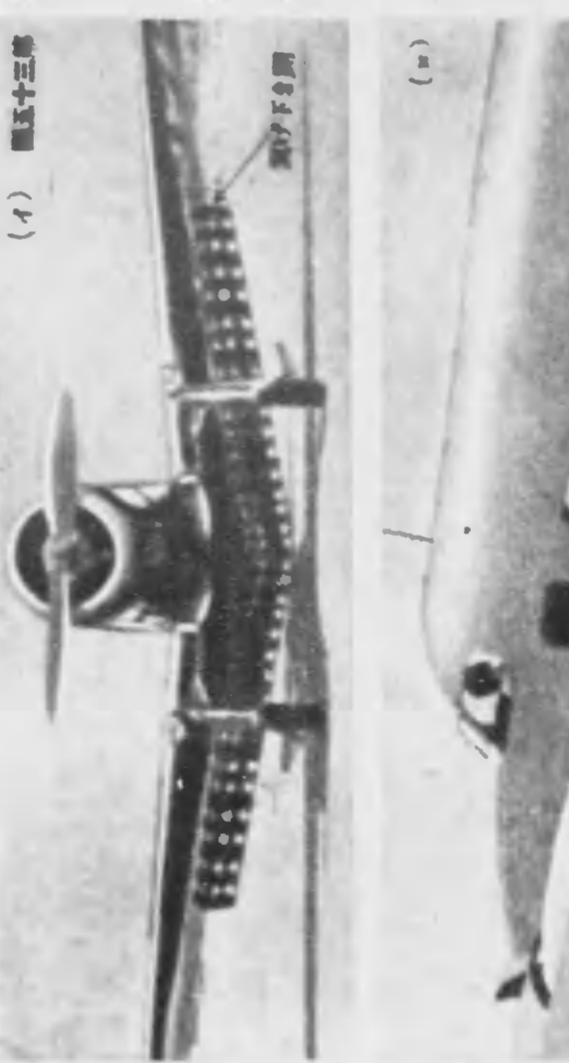
翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

火薬が爆発して飛び出します。ところで銃身には本誌の八月十六日(第三三四号)で説明したやうに、銃身があつて、弾丸が射撃してはくまゝで飛ぶやうになつてゐますが、そのため弾丸は第二回に説明したやうに、銃身よりも太く造られてゐます。つまり、火薬の力で太い弾丸が細い銃



弾丸の被甲はこのやうに銃身に嵌込んでゐますが、もし被甲と銃身との間に何分の一ミリでも隙間があれば、火薬の爆力はそこから逃げ出して、折角の大きな力が少なくなり、弾丸を發射する力が弱まります。といつて、硬い被甲を銃身の隅から隅までなくすきのないやうにすることはむづかしいのです。そこで被甲に孔をあけると、火薬の爆発でできたガスが弾身と被甲との間へ入りこみ、被甲を押し離しますから、被甲のその部分が特に大きくふくらみ、銃身の隅々までびつたりおしつけられ、火薬の大きな爆力を送りません。被甲に僅かにあいてゐる孔がこんな大きな働きをしてゐるわけで、かやうな細かいところ一つでも十分に活用されてゐることを知つて兵器を手にする時、材料の質を認めるものといふことがよく分ります。



翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

弾丸の被甲はこのやうに銃身に嵌込んでゐますが、もし被甲と銃身との間に何分の一ミリでも隙間があれば、火薬の爆力はそこから逃げ出して、折角の大きな力が少なくなり、弾丸を發射する力が弱まります。といつて、硬い被甲を銃身の隅から隅までなくすきのないやうにすることはむづかしいのです。そこで被甲に孔をあけると、火薬の爆発でできたガスが弾身と被甲との間へ入りこみ、被甲を押し離しますから、被甲のその部分が特に大きくふくらみ、銃身の隅々までびつたりおしつけられ、火薬の大きな爆力を送りません。被甲に僅かにあいてゐる孔がこんな大きな働きをしてゐるわけで、かやうな細かいところ一つでも十分に活用されてゐることを知つて兵器を手にする時、材料の質を認めるものといふことがよく分ります。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。



翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

翼に揚力が生じるのは、第三十二圖のイのやうに、空気の流れが翼の上と下とに流れる時、翼の形もその通りに作られます。流れの方向が口のやうに曲ると、翼の上側に渦はかりで、空気の流れは割れます。これを翼の失速といひます。その原因を説明しまさう。

説書文藝

水

内地から離れて来る間もなく、夫は舞臺の観衆へ轉任になつた。石油燈一ぱい七錢で水を買ふのに、妻は一番驚いた。濁つて汚い水だこれ、目を洗ひ味も洗ふのかと思ふと、胸が盛かつた。それから半年の間に、白い重布も風着も黄色くやつてしまつた。おまけにその年は十二月に入ると、井戸の底まで凍つたりしい。苦力がどこからか氷塊を運んで来る。長い時間かつて、その氷塊の風呂をたまにたてる。今はもう、寶澤を言ふどころでなく、かじかんたんの骨も潤まる有難さだが、遠い夢のやうに、黒い手拭を持つて、肩まで浸つて、湯のなかに手足の美しく見えた、故郷の風呂が思ひ出される。

「あ、すみませんが、お宅にお水降つておもしろい、これに少し……」

と、隣りの奥さんが小土瓶をさけて来た。

「久しぶりにお顔を磨いてみましたら、うかつかり

指使つてしまひましたの。」

水は降つてゐないが、お茶の沸したのを分けてあげた。

「早く春になつて、思ふ存分じやぶくお洗濯してみたいですね。そのお水を、ざあと流したら、どんなに気がいいでせう。と、隣さんは言ふ。水の響き、清らかな娘の女の望みだ。雪解けの水が待望しい。湯の水を流したら、気がよく土に吸はれてゆくだろう。その土から生つたんぼろが芽を出す。

隣りの奥さんを風呂に入れてあげてみると、北の國境へ向ふ汽車が谷間を上つて来た。報道の時間だ。南方の戦況を聞く。

「廣いわねえ。」とお湯のなかで隣りの奥さんが濁く言つた。ほんたうに夫の仕事の舞臺の観衆も南方の空までつながつてゐて、これが日本だ。官舎の表に出てみると、落葉の枯れ枝から寒気がばら／＼と流つて、煙の消花のやうだ。紅い空は母國の海を思はせ、妻は若い眼を上げた。



必勝増産へ、この冬も頑張ら抜か

今こそ一億、億の力の火となつて増産へ突進せねばならぬときです。決戦の冬、寒さを精神力で乗りこえ、一人残らず見直しをそろへて兵器と食糧の増産に邁進させよう。

(一)増産戦士をみんなて邁進
戦士や勤勞隊員、女子挺身隊員など

を互に勵まし合ひ、できるだけその職種の生産量も上げて、安心して戦場に身をまかせよう。

(二)寒害を予防、強い身體に

恐ろしい寒害は増産の敵です。靴や防寒具、湯桶、湯舟などの備へで冬の寒さに堪へ得る強い身體に鍛へませう。

またこの冬の寒、まきなどの燃料はできるだけ少くしてすむやうに工夫し、不要の薪木の

伐採などできるだけ燃料の目詰も工夫させよう。

(三)新嘗感謝祭は盛況に

二十三日の新嘗祭には各地の神社で新嘗祭が行われます。お五に「一粒の米」にもこもる有難い神恩に感謝し、いよ／＼食料性の金を深めませう。

農村では一層食糧増産と供出の決意を神前に誓ひませう。

白金供出さらに戦果あがる

財界有力者の供出——財界では既に去る十月二日の白金供出日に三万五千円にのぼる供出を行つたが、再び一層の成果をあげるために、十四日再び東京都商工経済会において「白金ダイヤ供出式」を開催し、藤原東洋大主席の下に浅野總一郎氏を始め、三井、三菱、大倉、安田、古河等、財界の代表者が集つて根柢を奨励し、互願の白金を供出した(そく／＼持ちこまれる白金は宮本隆雄東洋大主席)。

映画人の供出——十月十日映畫界の大御所、藤野秀夫を始めとし、人江九か子、原節子等の幹部連は大日本映畫協會に集り、白金の即時供出の實行と運動を申合せ、早速手持の白金を交際費等に附けると共に十二日から六日間、東京はじめ各大都市の舞臺から一般に呼びかけた。

舞臺家の供出——舞臺協會では十四日、副会長花柳壽輔以下全会員が各自所有の白金製品は勿論、會員の門下生の家庭をも動員して集めた現品を持寄つて供出した。

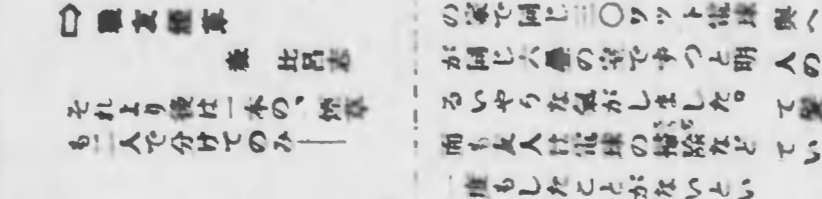
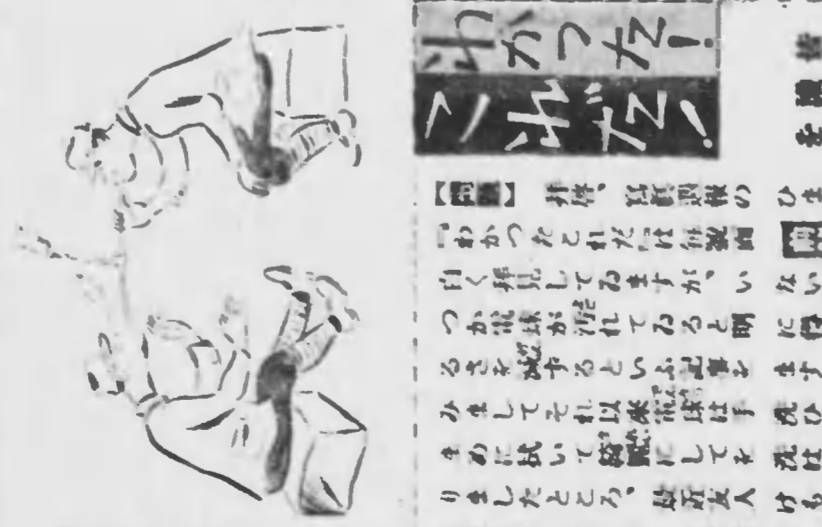
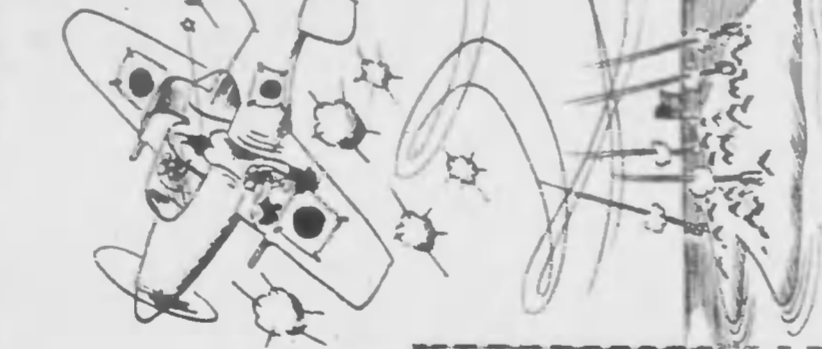


弾槍

横山登一 33



弾槍



それより後は一本の、煙草も一人で分けてのみ——

自愛自衛 横井誠太郎
米飛行士一発、いざいざいざい味方だよ
この日の丸は、いざいざい、やめてくれエッ

煙草の毒 秋 玲二
「う、何やこのありさまは、わし今この年になつて始めて煙草の害を知つたぞ」

水が来た! 水が来た!
皆さんの御意、工夫知機を動員してこの戦路を開通して下さい

【四】井原、真田調のひま子……(善は実業) 有線や流粉の白く輝いてゐますが、いらない折、どこの家でも簡易つか電球が流れてゐると同時に得られる電球の水がありるさを減ずるといふ記事をみます。らどんの細で汗です。みましてそれ以来電球は手洗ひ粉がないからといつてまめに拭いて掃除してを洗はずにおては不潔で見かりましたところ、最近友人けんへますから、戦時下の婦人の身元しなみの一つとして電球の水もいよ／＼と工夫していただきます